

## 起死回生

北基行 訳

中国 西安 乾陵の獅子

## あの世からの帰還

起死回生、いわゆる死からの蘇生、この故事は、昔の中国にたくさんある。ただ神話との境界が紛らわしいものも多い。いままで我々は、荒唐無稽の説話として、これらの故事に注意を払ってこなかった。最近のニュースによると、ブルガリアの医師が、死後二十分経過した患者の蘇生に成功したようだ。こんな談話が飛び込んできて、俄然死からの帰還問題が我々の興味を引くようになった。

死後に二十分経って生き返ったナイドロノフは、作中に三相 380V の電流に触れ、即、心臓鼓動が停止し、呼吸も止まった。中国古書でこの状況を“暴歴（けつ）而死”（卒倒して死ぬ）という。外科医のドロジヤンは直ちに手術を決定した。同時に彼女の胸に手を入れ、心臓をマッサージし、一本のゴム・チューブを口に差し込み、酸素を注入した。ドロジヤンの手が死者の心臓に触れマッサージが始まったのが、彼女の死後二十分が経過した後のことである。マッサージを九十分間継続すると、死者の心臓が正常に収縮し始めた。これは即ち、ナイドロノフが死去して一時間五十分が経って、やっと復活を始めたことになる。一滴の出血もなかった、切開箇所から、この時初めて



扁鵲（想像図）

血が流れ始めた。手術後三日目に、彼女の意識が回復した。この事実は、我々社会主義の医学が、その他の事業と同様に、きわめて優越していることを示した。一度死んだ、人の命を生き返えさせた、なんと素晴らしい、偉大な勝利ではないか。

ここで、私はすでに伝承が途絶えている中国医学史上の経験、不完全ではあるが、それを我々が医学会に披露したい。起死回生問題の研究に、参考になれば幸いである。

起死回生の故事が表れるのは、紀元三世紀以前にさかのぼる。以後二千年の長い間伝その記述が伝えられてきたが、たいした価値のないものや、少し価値のあるもの色々である。その中でまず注目いただきたいのが、司馬遷が書いた故事である。

『史記』『扁鵲傳』にある、古代の名医 扁鵲が魏国をよぎる時、魏の太子が“暴歴（けつ）而死”したのに出くわし、しかも“死して未だ半日ならず”という。扁鵲は太子の救援を申し出て、魏君がそれを受け扁鵲に任せた。“扁鵲乃ち弟子 子陽をして鍼を礪（と）がしめ、以て外の三陽・五会を取る。間（しばらく）く有りて、太子蘇る。乃ち子豹をして五分の熨（い）を為り、八減の膏を以て、和して之を煮しめ、以て更に両の脇下を熨す。太子起坐すれば、更に陰陽を適す。但だ湯を服すること二旬にして故に復す。”扁鵲は弟子の子陽、子豹を指揮して石針を中心に、灸熨と飲み薬を副として治療して、死んでから半日経った魏の太子を蘇生させた。



扁鵲が治療をしている図（石板拓本）

『史記』の作者、司馬遷はたいへん真面目な歴史家である。かれが記載する史実は、いづれもよく調査のうえ検討が加えられ採用されたものである。この故事もまざら根拠なしではないだろう。扁鵲が石鍼を打った箇所は、三陽と五会で、湯煎薬は八減剤を使い、灸熨を両脇の下にあてた。医学の専門家が、これを詳細に研究すれば、その裏に隠されている、奥妙なノウハウが導きだされるかも知れない。

それからもう一つ、忘れてならないのが劉向の『説苑』にも出てくる、扁鵲が魏国をよぎる時に会った太子の“暴疾而死”である。扁鵲は“先に軒光の竈、八成の湯、砥針礪石を造らしめ、三陽五輪を取る。子容は薬を搗ち、子明は耳を吹き、陽儀を反神せしむ。子越は形を扶け、子游は矯摩し、太子遂に復生することを得たり”。この記載内容は『史記』のものと基本的に同じで、一事件が二種の伝説となったのかもしれない。しかし、劉向の方が、鍼灸、薬物、扁鵲の五人の弟子が行った吹気、按摩などの物療にわたり、記載材料が多い。これは、間違いなく研究者に有益な資料になるだろう。

扁鵲の後、三国時代の東呉に神医が現れる。名を董奉というが、彼も起死回生術に長けていた。『三国志』『呉志』卷四『士燮傳』の注によると、“燮 嘗て病死し、己に三日なり。仙人董奉 一丸の薬を以て與へ服し、水を以て之を含み、其の頤を捧へ、揺り之を消（の）ましむ。食（の）み頃（しばらく）して、即ち目開き手動き、顔色漸に復し、半日にして能く起坐し、四日して復た能く語り、遂に常に復せり。”晋代の葛洪は『神仙傳』の中で、この故事を取り上げ、これをさらに具体的に、士燮は交州の刺史であり、毒を得て病死した。董奉が三粒の丸薬を与えた、と述べている。この類の資料に、我々は無関心で相手にしなかったが、現在読んで見ると、なるほどと思わせる一抹の道理がある。これら故事中の死はすべて突然死、毒死であり、老衰や自然死とは違って、手を打てば生き返れそうである。それで、ここで大略を紹介したのである。

その他故事の紹介は、このぐらいにしよう。これ等の資料について興味のある方は、専門的な見地から更なる研究をお願いしたい。一番望ましいのは、中・西洋医者が共同で資料を集め、選別し、批判、取捨を経て有用資料を選び出し、その古代人の遺産、起死回生という古い課題に、科学の光を当て新しい解答を導きだしていただきたい。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

## 『起死回生』ひとそえ

「起死回生」は小学生の頃に耳にしたと思います。ラジオの野球中継やスポーツ欄の見出しに「長嶋、起死回生の本塁打」として使われていました。まさか「岸改正の安保条約」の政治記事ではなかったと思います。実態よりは誇張された漢語多用、それも文語調の「堂々たる巨漢力士」「空前絶後の怪童、中西太」「懸河のドロップ」などの事例は枚挙に暇がありません。

しかし、鄧拓が次々に挙げていた「起死回生」は文字通り「息をふき返し」生死の境から戻ってくることであり、スポーツ欄でも政治欄の当てこすりでもありません。それまで神話や荒唐無稽な伝承として捉えられていた事例を、まさに枚挙に暇がないほど挙げています。思い込みから脱却して、科学的な光を当てた解釈をする姿勢は、ある意味で教条的な唯物史観論者から離れていくのではないかと危惧さえも覚えます。また、前号で相対性理論を語り、今号では古文書を快刀乱麻のようにさばく鄧拓の博覧強記には熱心な読者もいたでしょうが、嫉妬を覚える一部の幹部もいたことでしょう。とりわけ学歴不足で北京大学で学ばず、北京大学図書館で働いた経験のある湖南訛りの指導者が苦々しく思っていたことは確かでしょう。



現在の北京大学図書館

井上邦久

## 起死回生 原文

中国古代有许多起死回生的故事，其中包含了大量的神话成分。我们从来都把这许多故事，当做无稽之谈，不去注意它们。但是，最近知道，保加利亚医生竟然救活了死去二十分钟的人，这就不能不引起我们重新研究起死回生的问题了。

那位死去二十分钟的纳伊德诺娃，是在工作时触了三百八十伏特的三相电流，心脏立即停止了跳动，呼吸也停止了。这个情形很象中国古书上所谓“暴歴而死”。外科医生德雷江决定给死者动手术，他把手探入她的胸腔，按摩她的心脏，并且把一根橡皮管通进她的嘴里，向里面输氧。当德雷江的手触及死者的心脏，开始按摩的时候，她已经死去二十分钟了。按摩了九十分钟以后，死者的心脏才开始正常的收缩。这就是说，纳伊德诺娃是在死去一小时又五十分钟以后，才开始复活的。本来开刀的地方，一滴血也没有，这时候刀口才开始流血。手术后的第三天，她就恢复了神智。这件事充分地显示了我们社会主义国家的医学，和其他事业一样具有极大的优越性。人的生命能够死而复生，这是多么伟大的胜利啊！

在这里，我想应该提起中国医学史上某些失传了的不完全的经验，以供我们的医学界，在进一步研究起死回生问题的时候，作为参考。

关于起死回生的故事，我国在纪元前三世纪以前就有了。从那以后，二千多年间都流传着一些文字记述，有的显然没有什么价值，有的则比较有价值。其中最值得注意的，首先应该提到汉代司马迁记述的一个故事。

据《史记》《扁鵲傳》的记载，古代的名医扁鵲，路过魏国，正值魏太子“暴歴而死”，并且“死未半日”。扁鵲自告奋勇要把他救活，魏君就请扁鵲去抢救。“扁鵲乃使弟子子阳砺针砥石，以取外三阳五会。有间，太子苏。乃使子豹为五分之熨，以八减之剂和煮之，以更熨两肋下，太子起坐，更适阴阳，但服汤二旬而复故。”看来扁鵲指挥他的徒弟子阳、子豹，以针砭为主，以灸熨和汤药为辅，竟把死去半日的魏太子救活了。

《史记》的作者司马迁是很认真的历史家。他记载的史实，一般说来，都经过调查和考核。那末，这个故事恐怕也不是全无根据的。扁鵲进行针砭的部位是三阳、五会，他用的汤药是八减之剂，灸熨则在两肋的下面。如果有医学家细心加以研究，我想一定可以找到其中的奥妙，探索出一些道理来。

还有值得注意的是：汉代的刘向，在《説苑》一书中，又说扁鵲到赵国的时候，刚巧赵太子“暴疾而死”，扁鵲“先造轩光之灶、八成之汤，砥针砺石，取三阳五轮，子容搗药，子明吹耳，阳仪反神，子越抹形，子游矫摩，太子遂得复生”。这一段记载同《史记》所载的基本相同，也许是一件事的两种传说。但是，刘向所记的材料更多一些，除了针灸、药物之外，还有扁鵲的五个徒弟分别进行吹气、按摩等等动作，这些对于研究者无疑地将更有用处。

在扁鵲以后不很久，三国时代的东吴有一个神医，名叫董奉，也有起死回生之术。据《三国志》《呉志》卷四《士燮傳》注：“燮尝病死，己三日。仙人董奉以一丸药与服，以水含之，捧其頤，摇消之。食顷，即开目动手，颜色渐复，半日能起坐，四日复能语，遂复常。”晋代葛洪在《神仙傳》中也记述了这个故事，它更具体地说，士燮是做交州刺史，得毒病死的；董奉给他吃的有三颗丸药。对于这类记载，我们过去根本不愿意去睬它，可是现在再看一下似乎还有一点道理。特别是这些故事中的死者，都属于暴疾、毒病而致死的，不同于自然衰老无可挽救的死亡现象，好象比较有可能复活似的，因此我在这里要大略加以介绍。

其他的故事我不再列举了。希望对这些材料有研究兴趣的朋友们，专门进行研究，最好有中西医共同合作，把同类的资料收集在一起，加以甄别、批判和取舍，仔细分析和论证，把其中比较有用的资料做一番整理，以便对起死回生这个古代流传下来的老题目，能够进一步做出科学的解答。